

群 教 セ	F09 - 01
	平 14.205 集

日常生活に生きるソーシャルスキル・ トレーニングプログラムの工夫

「仲間づくり支援スキル」の選定と 個人カードの利用をとおして -

長期研修員 茂木 裕代
指導主事 武藤 榮一

《 研究の概要 》

本研究では、まず、トレーニングの基になる「仲間づくり支援スキル」を児童の発達段階などを考慮して選定した。そして、その中から児童の実態に合ったスキルを選び、ソーシャルスキル・トレーニングを実施した。さらに、学んだスキルが日常生活に生きてつながるように個人カードを取り入れたソーシャルスキル・トレーニングプログラムを工夫した。その結果、学んだスキルを日常生活で使えるようになった児童が増えた。

【キーワード：小学校、教育相談、ソーシャル・スキル、仲間関係、個人カード】

主題設定の理由

最近の児童の様子をみると「ありがとう」や「ごめんなさい」が言えない、友だちの中に入って遊べない、人の気持ちを考えられないなど人とのかかわりがうまくできない児童が増えてきている。そこで、今、学校、学級という社会集団の中で、意図的に人とうまくかかわっていくための技術（ソーシャルスキル）を教えていくソーシャルスキル・トレーニングが注目されてきている。このようなトレーニングにおける成果については、藤枝・相川(1999)の研究などから好ましい人間関係を作っていく手段として有効であったと報告されている。

ソーシャルスキル・トレーニングにおいては、このようなトレーニングの成果が、日常の行動につながって、日常生活の中で使われていくこと、すなわち日常生活に生きることが大事である。しかし、日常の行動につなげていくための研究は、まだ十分できていない。

そこで、本研究では学んだスキルが日常生活に生きて使われていくために、個人カード（以下名人カードとする）を取り入れたソーシャルスキル・トレーニングプログラムを工夫した。名人カードを用いることで、児童が目当てを持ち、学んだスキルを学級や家庭などで実際に使ってみようとする意欲を持てるようにするとともに、そのカードの記録に指導者からの励ましの言葉を書き入れることにより、目当ての行動が増えるようにする。その結果、行動をとおしてスキルの大切さを再認識することができ、学んだスキルが日常の生活の中で使われていくようになる考えた。

また、家庭向けに学習したスキルの内容を知らせるパンフレットを作り、家庭でも児童の行動を意識してもらうとともに、家庭でのかかわり方の参考になるように考えた。

なお、トレーニングの実施にあたっては、児童の仲間関係の変化、スキルと遊びの関係などをもとに「仲間づくり支援スキル」を選定した。そのスキルの中から実態に合わせてトレーニングするスキルを決めて実践した。本研究では中学年での「仲間づくり支援スキル」を中心に実践した。

研究のねらい

児童の仲間関係の変化などをもとにして「仲間づくり支援スキル」を選定する。

「名人カード」を取り入れて、学んだスキルが日常の行動につながるためのソーシャルスキル・トレーニングプログラムを作成する。

研究の内容

1 学級におけるソーシャルスキル・トレーニング

ソーシャルスキルとは、人とうまくかかわっていくための技術である。こうした技術はしつけとして親や祖父母などに「何と言ったらいいの」「ありがとうと言いなさい」などと言われたり（言語的教示）、親や友だちの行動をまねしたり（モデリング）、親や周囲の人によくできたときに褒めてもらったり、悪いことをしたときに叱られたりということを繰り返し学習しながら（リハーサル）他の場面でも使えるようになって（般化）自然に身につけてきたものである。また、兄弟、姉妹や同年齢、異年齢での集団での遊びをとおしてもさまざまなスキルを獲得することができた。（図1、上）

しかし、今の子どもたちは、家庭や社会の変化で、今まで子どもたちが自然に身に付けていたソーシャルスキルを身に付けることができなくなったと考えられる。そこで、図1の下のように学校、学級で意図的にこうしたスキルを教えていくソーシャルスキル・トレーニングが必要になったと考える。

学級でのトレーニングでは、友だちとかかわってスキルの知識を獲得したり、スキルの練習したりする。トレーニングをとおして、今まで優しい言葉をかけてもらうことのなかった子が仲間から優しい言葉をかけてもらい、優しい言葉をかけてもらうよさを知ることができる。そして、トレーニング後は、学級で同じスキルを学習しているのでスキルを受け入れやすい土壌ができているという仲間集団のよさを生かして、練習したスキルを実際に使っていきことができる。仲間に入るときの声のかけ方を模擬体験し、休み時間などにやってみようとするときに、そこに同じスキルを学んだ仲間がいることで、学んだことを行動に移しやすく、学んだスキルを日常の行動につなげることができるのである。なお、学級でのトレーニングでは実態に合わせてトレーニング内容を組み立てていくことが大事である。

2 仲間づくり支援スキルの選定

良好な仲間関係を作ることにより、そこでまた、さまざまなソーシャルスキルを獲得し、スキルを発達させることができる。仲間づくりに関係するスキルとして、C.A.キング、D.S.キルシェンバウム(1996)河村茂雄(2001)相川 充(1999)などの様々なスキルの分類がある。これらのスキルを参考に図2に示したように、児童の仲間関係がどう変化するのか、共感性の発達

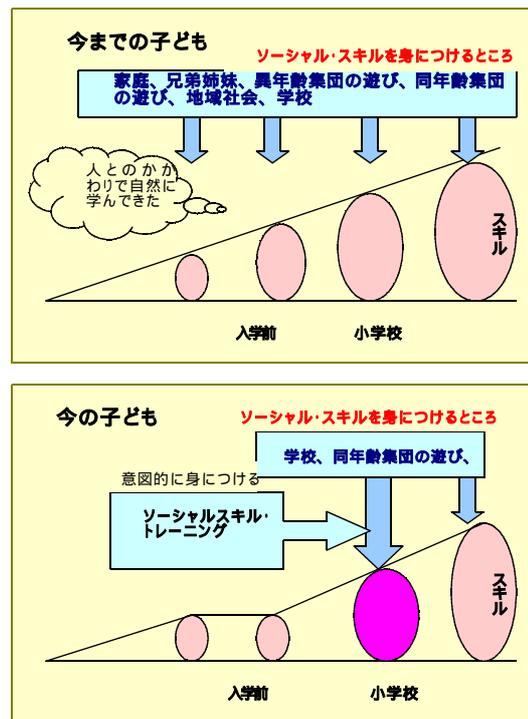


図1 スキルをどう学ぶか

はどうか、児童の遊びとスキルの関係はどうかなどを考慮し「仲間づくり支援スキル」を選定した。選定においての基本的な考え方は表1の中に示した。表1の「仲間づくり支援スキル」の中で印のついている番号はその学年で重点として扱うスキルで、他は学級の実態に応じて組む。児童の発達をもとに考えたので、低学年の重点スキルであっても中学年で定着が不十分なきにはそのスキルを取り入れることが大事である。

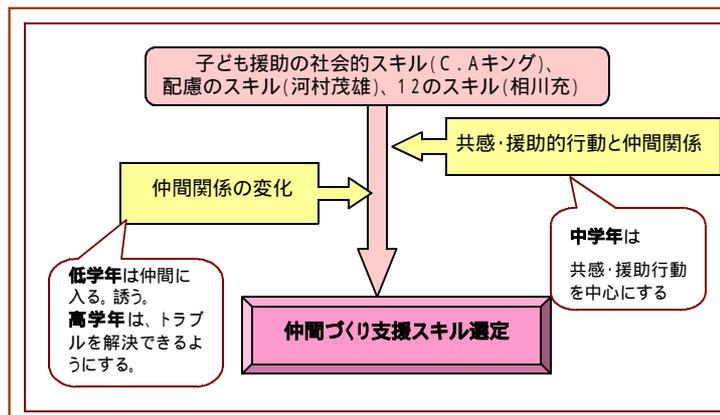


図2 仲間づくり支援スキルの選定

表1 仲間づくり支援スキル

	低 学 年	中 学 年	高 学 年
基本とする考え方	仲間関係が固定せず流動的なので(中沢、2000)、話を聴く、仲間に入る、誘うなどのスキルを身に付け仲間に入っていきことができるようにする。 特に低学年においては、遊んでいる仲間に入っていきできれば、そこから遊びをとおしてスキルを学ぶことができると考える。	仲間が密接な関係を持ってきて、思いやりのある行動が増えてくる(中沢、2000)(堂野、1999)ので相手の気持ちを考える内容を中心にする。相手の気持ち考えた言葉をかけることから仲間関係を良好にしていく。 女子においてはこの時期に共感・援助的なスキルを獲得していないと友だちとの遊びが減る傾向が見られる。(大島、2002)	友人関係をめぐるトラブルを体験し、悩むようになる(中沢、2000)ので、仲間関係の中から、出てきた問題に対処できるようなトラブル解決策についてのスキルを学ぶ。
めざす仲間のかたち	仲間に入る。仲間を誘う。 	仲間の中で、相手の気持ちを考えたかかわりができる。 	仲間の中でトラブルを解決していく。
仲間づくり支援スキル	「ごめんなさい」「いいよ」が言える。「ありがとう」が言える。 相手の話を聴く。 仲間を誘う。 仲間に入る。	1「ごめんなさい」「いいよ」が言える。「ありがとう」が言える。 2 相手の話を聴く。 3 仲間を誘う。 4 仲間に入る。 どういふことを言われるといやなのか知る。どういふことをされるといやなのか知る。 相手の気持ちを考えて話す。励ます。ほめる。助ける。	1「ごめんなさい」「いいよ」が言える。「ありがとう」が言える。 2 相手の話を聴く。 3 質問する。 4 仲間を誘う。 5 どういふことを言われるといやなのか知る。どういふことをされるといやなのか知る。 6 相手の気持ちを考えて話す。励ます。ほめる。助ける。 トラブルの解決策を考える。

なお、本研究の実践は、中学年が共感・援助的かかわり(相手の気持ちを考えたかかわり)を中心とした仲間づくりを考える大事な時期と考え、中学年におけるスキルトレーニングを行った。

3 日常生活に生きるソーシャルスキル・トレーニングプログラム

(1) 日常生活に生かすための手立て

「日常生活に生きる」とは、図3にあるように「C：トレーニング後の成果が、日常の行動につながって、日常の生活の中で使われていくこと」と捉える。「A：授業中のトレーニング」がCにつながっていくために、本研究では「B：日常生活に生かすための行動」を取り入れた。この過程に名人カード（資料1）を使ってAの後に具体的な行動の目当てを持てるようにした。そこに、毎日、指導者（担任または研究者）のコメントを加え、スキルを行動に移すときの励ましになるようにするとともに、学んだことを実際に意識して使っていこうとする態度を育てるようにした。これを一定期間繰り返し、指導者に認められることで行動が増えるとともに、友だちとかかわりながらスキルの大切さを実感できると考え。そして、カードの終了時には「名人賞」を渡し、実行できたことを認め、カードが終わっても行動していこうとする気持ちを持てるようにした。

また、家庭向けのパンフレット（資料 p.16、17、18、19 参照）を作り、スキルを学んだ日に配布し、スキル内容を知らせるとともに、家庭でのかかわりかたの参考なるようにした。このようなBの過程を取り入れることでAで学んだことが日常の生活の中で使われ、日常生活に生きていくと考える。

(2) トレーニングプログラムの過程

図4のようにまず、授業中にスキルを学ぶトレーニングを行う（認知、感情、行動）。トレーニング終了後、振り返りカードに感想を記入し、スキル大切さについて認識できるようにする（認知）。その後、名人カードに目当てを記入し（目標決定）、意識をしながら行動し、行動の記録をとる。カード終了時に今までの行動を振り返ることにより、スキルの大切さを再認識（認知）できると考える。

その結果、カードが終わっても学んだスキルが日常生活に生きていくと考える。詳しい活動内容は次ページ、表2「日常生活に生かすソーシャルスキル・トレーニングプログラム」の流れとする。

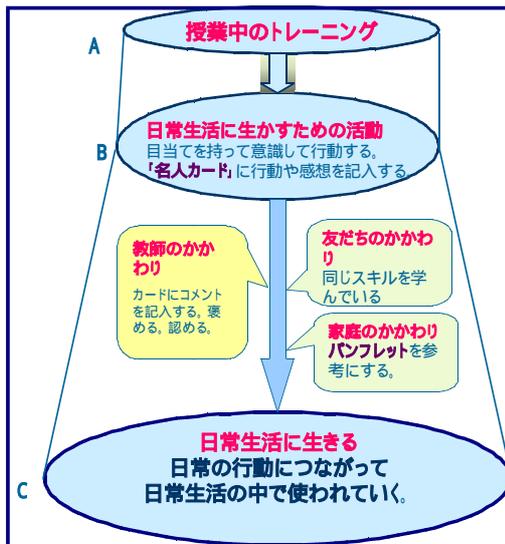


図3 日常生活に生きるまでの過程

資料1 名人カード例

かかわり名人をめざそう 名前() 名人カード

自分のめあてを書こう

「ありがとう」は自分で言ったのでも、人から言われたのでも書いてください。「ごめんなさい」は自分で言ったのだけ書きましょう。

日	さいいてん	こんなことができたよ、こんなことが言えたよなど、ちょっと一言	先生から
10/3 (木)			
10/4 (金)			
10/7 (月)			
10/8 (火)			
10/9 (水)			
10/10 (木)			
10/11 (金)			

さいいてんは自分で「よくできたよ」「できたよ」「もう少し」でつけてみよう。最後に今までやってみて感じたことを書いてみよう。

感想 _____ 先生から _____

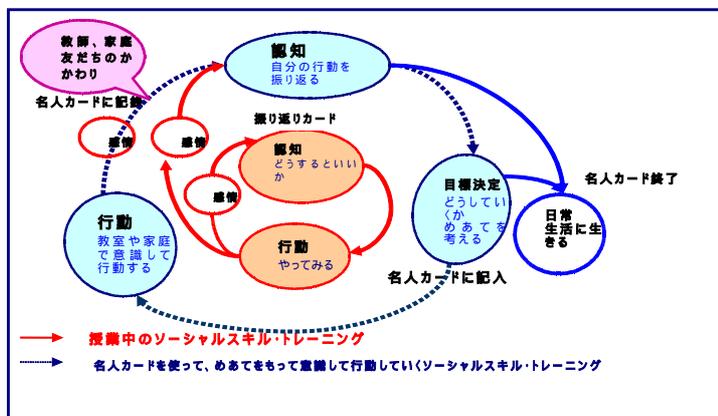


図4 トレーニングプログラムの認知、感情、行動の過程

表2 日常生活に生かすソーシャルスキル・トレーニングプログラムの流れ

		思考の過程	児童の活動	支 援 ・ 留 意 点	
授業中のソーシャルスキル・トレーニング	トレニング	認知	スキルの必要を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・学級の中で実際にあったことなどをもとにしたロールプレイなどを取り入れて、スキルの必要を印象づけられるようにようにするのよい。 ・児童の言葉を使って教えた知識を具体的な言葉にまとめていく。(聴き方のスキルでは、相手の顔を見る、うなずくなど) ・カードでスキルの内容を提示するとよい ・必要な言葉が児童から出て来ない場合は教師の否定的なモデリング(モデルを示す)を使う。 	
		教示 モデリング	具体的な言葉でスキルを知る(知識として知りやってみようとする)		
		感情	興味のもてる活動		
		行動 リハーサル フィードバック	実際に練習して、スキルを学ぶ。(新しい行動の獲得)	<ul style="list-style-type: none"> ・ロールプレイなどで実際に練習して、スキルを学ぶ。 ・トレーニングするスキルの内容によってはリハーサルに時間をかける。(仲間入り、仲間を誘うなど) ・トレーニング中に児童に肯定的な声かけをしていく。(行動の強化) 	
	認知～行動の繰り返し				
	振り回りカード	感情	個人カード1(振り回りカード)に記入	<ul style="list-style-type: none"> ・トレーニング場面で児童が感じたことを振り回りカードに書く。(しっかり聴いてもらえるとうれしい。「ありがとう」と言われてうれしいなど) ・トレーニング中に気持ちを確かめておくとうれしい。 	
認知 フィードバック		個人カード1(振り回りカード)に書いたことを発表する	<ul style="list-style-type: none"> ・振り回りカードに書いた感想を発表し合うことで、体験した感覚・スキルの大切さを言葉で捉えられるようにする。 ・ふりかえったことが目当てにつながるようにする。 		
日常生活に生かすための活動	名人賞	目標決定	個人カード2(名人カード)に記入	<ul style="list-style-type: none"> ・個別にかかわって個々の目当てがもてるように支援する。 ・具体的な活動を例として示す。 	
		行動	個人カード2(名人カード)に行動の記録をつける	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の目当てに向けた行動や気持ちを簡単なコメントにして何日間か記録する。その日の行動を自分で振り返って評価する。(で自己評価) ・児童の書いたコメントに対して、行動や気持ちを認めたり、励ましたりしたコメントを書いて返す。できないときがあっても目当てに向かってやろうとしている気持ちを認めたコメントを書いて返す。 ・取り組んでいるスキルについて、日常的に話題にしていく。 ・カード最終日に行動をとおして感じたことを名人カードに記入する。 	
	感情				
	認知	行動を通して スキルのよさ、大切さに気付く。	<ul style="list-style-type: none"> ・名人賞を用意し、名人カード終わったときに出す。 ・何日間か名人カードの記入することをおして、行動していくことのよさに気づき自分なりに日常の行動につながるめあてを持てるようにする。 		



研究の方法

1 検証方法とソーシャルスキル・トレーニングプログラムの手順

(1) 検証方法

検証方法として、次の内容を行う。

指導者の観察(トレーニングの事前、途中、終了後、終了1～2ヶ月後)

自己評価（庄司一子、社会的スキル尺度・・・トレーニングの事前、事後、終了1～2ヶ月後）
 担任の評価（庄司一子、社会的スキル尺度・・・トレーニングの事前）
 児童の相互評価（アンケート）

トレーニング終了1～2ヶ月後の感想

トレーニング終了1～2ヶ月後と記述したのは、初めに実施したスキルトレーニングから、最後に実施したスキルトレーニングまでの期間が1ヶ月以上あったからである。

これらのことから、児童の変容をとらえていきたいと考える。

(2) 実施手順

図5のとおり から まで実施する。
 から は決定したスキルを繰り返す。

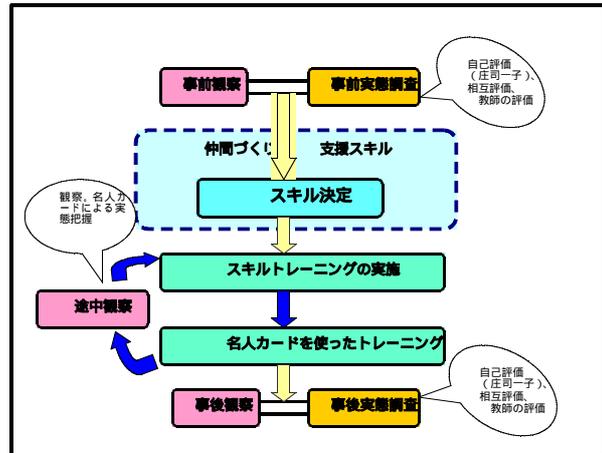


図5 トレーニング手順と検証方法

2 実践計画

- (1) 対象学年 4年生 34名
- (2) 教育課程での扱い 総合的な学習の時間

実践を行う置籍校ではフリー総合として学級に10時間設定されている時間を使う。スキルの内容によって、道徳と組み合わせたり、教科等で行ったりすることができる。

- (3) トレーニングスキルの決定（図5の ~ の手順による）

事前観察と自己評価

事前観察(指導者)

- ・話の聴き方が良くできていない児童が多い。
- ・「ありがとう」「ごめんなさい」を言えない児童が多い。
- ・人の気持ちを考えられない児童が多い。

考え方

自己評価で「ありがとう」「ごめんなさい」は言えているが、観察からできていないので実施スキルとして取り入れる。
 共感・援助的かかわりは観察、自己評価とも低いので取り入れる。
 聴き方は観察から取り入れる。

自己評価(4観点で自己評価した平均)

- 社会的スキル尺度（庄司一子）
- ・共感・援助的かかわり 2.6
- ・積極的・主張的かかわり 2.85
- ・からかい・攻撃的かかわり 3.05
- ・拒否・無視的かかわり 2.9
- 聴き方自己評価 2.9
- 「ありがとう」「ごめんなさい」の使われ方 3.16

注 低いほどできていない

スキルの決定

- 1 「ごめんなさい」「いいよ」が言える。「ありがとう」が言える。
- 2 相手の話を聴く。どういことを言われるといやなのか知る。どういことをされるといやなのか知る。相手の気持ちを考えて話す。励ます。ほめる。助ける。

注 番号は「仲間づくり支援スキル」(表1)の番号

(4) 実践計画表

	内 容
7月下旬	自己評価、相互評価、ソシオ、教師の評価
9月上旬	事前観察
9月17日(火)	研究授業(話の聴き方)聴き方名人カード(6日間)
9月25日(水)	事後観察(話の聴き方)
10月3日(木)	研究授業(ありがとう、ごめんなさいの言葉1)かかわり名人カード(7日間)
10月8日(火)	事後観察(ありがとう、ごめんなさいの使われ方) 道徳「カンボジアから来た転校生」
10月17日(木)	研究授業(いやな言葉、うれしい言葉5)
10月18日(金)	研究授業(相手の気持ちを考えたことばかけ6)やさしさ名人カード(6日間)
10月22日(火)	事後観察(援助、かかわりの様子) 道徳 自己評価、相互評価、ソシオ
	道徳「となりのせき」(東書)他
11月29日(金)	自己評価、相互評価、ソシオ、教師の評価

事前・事後の実態調査

事前・事後の観察

研究授業

関係する道徳

実践の概要と結果

1 実践の概要

(1) 名人カードをとおしてどのようにかかわっていったのか。

聴き方のスキル

(指導案は資料 p.1 参照)

ねらい

よい聴き方で聴いてもらったときの心地よさを感じ、よい聴き方で聴こうとする態度を育てる。

聴き方を身につけることで、人とかかわれるようにしていく。初めに2人でのかかわりができるようにしていく。

活動内容
行動

・よい聴き方について学んだ後、実際により聴き方、よくない聴き方を体験し、そのときの気持ちを振り返る。(ふりかえりカード(資料 p. 3 参照))
・振り返ったことを参考にして、名人カード(資料 p. 4 参照)に目当てを記入する。

感情・認知 トレーニング後の気付きはどうだったか。

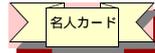
振り返りカード

から

・相手の話を最後まで聴いて姿勢をよくして聴きたいです。
・よく目を見て話すことがないので、これからは、ちゃんと目を見ようと思いました。
・相手を手悪さをしながら話を聴くと、なんだかすごくやで、話をその人にできない。だけど、話を最後までちゃんと聴いてくれると、ものすごうれしくていっぱい話したくなります。

目標決定

話す人の方を見て聴く。あいづちを打ちながら聴く。など



名人カードでの指導者のかかわり

児童が名人カードに記入した

感情・行動

お母さんの話でもあいづちを打ちながらきいた。
姿勢をよくしたら先生にほめられてうれしかった。
背筋を伸ばして聴けた。背筋を伸ばすと気持ちがいい。
姿勢をよくし、先生が話しているとき目を見た。
あいづちを打ちながらなるべく聴くようにしていた。

家でもやってみたんですね。
ちゃん、姿勢がとてよくなってきているね。すごいね。
「背筋を伸ばすと気持ちがいい」というのはすごく大事なことに気が付いたね。
とてもいい姿勢でいてくれたのがわかりました。
あいづちも打てるようになってきたんですね。

注 児童の感情・行動 が指導者の と対応している。

認知 (行動をとおして気付いたこと)

話を聴くとよくわかるんだなと思いました。
授業がよくわかった。
よく聴けて気持ち良かった。

家庭のかかわり (親向けパンフレットの返事)

・家でも、話をするときや聴くときは、相手の目を見て話を聴くように話しています。
・ついつい子どもの話をながら聴きしてしまうことが多いので親もがんばっていい聴き方名人になろうと思います。

児童の変容 (担任の観察)

トレーニング後の行動

・「聴き方名人」だよがクラスの合い言葉のようになって聴き方を意識するようになった。
・運動会前で合同の体育があるが、隣の学級の担任から聴き方がよくなったと言われた。
・外部講師が来たときに、メモをとりながらしっかり話を聴いていた。
・背筋が伸びて話の聴き方がとてもよい。話し始めるとみんなが集中してしっかり見ている。



授業中のトレーニングをとおして、聴いてもらうよさを体験した。また、カードで繰り返すことでしっかり聴いていこうとする姿勢が出てきた。

2人でのかかわりができるようになり、次のスキルにつながる。

かかわりのスキル

(指導案は資料 p.5 参照)

ありがとう、ごめんなさいのスキル

ねらい

「ありがとう」「ごめんなさい」という言葉を遣おうとする態度を育てる。

「ありがとう」「ごめんなさい」の言葉をきっかけにして、友だちとのかかわりをつくっていけるようにする。

活動内容
行動

・「ありがとう」の大切さ「ごめんなさい」の必要性に気づき、言い方を確認した後、練習する。練習した後、言われたときの気持ちを振り返る。〔ふりかえりカード(資料 p. 7 参照)〕
・振り返ったことを参考にして、名人カード(資料 p. 8 参照)に目当てを記入する。

感情・認知

トレーニング後の気づきはどうか。

振り返りカード

から

- ・「ありがとう」「ごめんなさい」と言われたら「どういたしまして」または「いいよ」と言うようにしたいです。
- ・ありがとうカードをもらったときは、気持ちがよかったです。「ごめんなさい」と言われたときは、(その前の)あやまられなかったときのいやな気持ちがぬけました。
- ・ありがとうカードをもらって「ありがとう」と言われたとき、自分がこんなことをしたんだなあと思った。

目標決定

「ありがとう」を言う。
「ごめんなさい」を言う、など

名人カード

名人カードに記入した感情・行動

今日、人におされて、人の足をふんでしまって「ごめんなさい」を言いました。
家でお母さんのたのまれごとをしたら「ありがとう」と言われた。
けんかして「ごめんなさい」が言えました。
今日は誰にも言えなかった。
「ありがとう」と言われてうれしかった。

名人カードでの指導者のかかわり

自分のせいでなくてもあやまれたね。
お母さんに「ありがとう」と言ってもらってよかったね。
けんかして「ごめんなさい」は難しいんだよ。よく言えたね。
言おうとする気持ちが大事だから、言えない日があってもいいんだよ。
「ありがとう」は言われるとうれしい言葉ですね。

注 児童の感情・行動 が指導者の と対応している。

認知(行動をとおして気付いたこと)

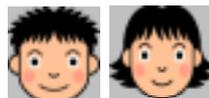
- ・「ありがとう」と「ごめんなさい」を言うと気持ちがすっきりすることがわかった。これからがんばる。
- ・「ごめんね」を言わないとそのままけんかが続いちゃう。
- ・今まではずかしくて言えなかったが、はきはき言えるようになったので、カードがなくても「ありがとう」や「ごめんなさい」を進んで言いたい。
- ・「ありがとう」や「ごめんなさい」はとても大切なものだと分かりました

家庭のかかわり(親向けパンフレットの返事)

- ・「ありがとう」「ごめんなさい」の二つの言葉は我が家では日常生活に必要な言葉です。素直にその言葉が言えるようになってほしいと思います。
- ・わざとでなくても人にぶつかったときなどにまず、「ごめんなさい」を言えるように親子で気をつけています。どうしても言い訳を先にすることが多いので、「自分がもし、反対の立場だったら、ごめんねの言葉があったらうれしいね」と教えています。

トレーニング後の行動(担任の観察) 児童の変容

なにかを借りたときに「ありがとうございました」と返せる児童が多くなった。
クラスみんなで使っていたので、かかわりがうまくなっていった。



授業中のトレーニングで「ありがとう」のよさを感じている。名人カードをとおしたかかわりで「ありがとう」「ごめんなさい」を遣ったかかわりができるようになってきている。

やさしさのスキル

(指導案は資料 p.9、10、12、13 参照)

されるといやなこと、言われるといやなこと、言われてうれしいこと

温かい言葉のよさに気づき、温かい言葉を遣おうとする態度を育てる。

ねらい

相手の気持ちを考えた言葉かけ

思いやりのある言葉をかけてもらったときのよさに気づき自分も思いやりのある言葉をかけようとする態度を育てる。

活動内容
行動

言われて嫌な言葉、うれしい言葉を知り、実際にことばをかけ合い、言葉をかけられたときの気持ち振り返る。〔ふりかえりカード(資料 p. 11 参照)〕

・相手の様子からどんな言葉をかけるとよいか考え、実際に声をかけ合うことにより、思いやりある言葉をかけられたときの気持ちを振り返る。
〔ふりかえりカード(資料 p. 14 参照)〕
・振り返ったことを参考にして、名人カード(資料 p. 15 参照)に目当てを記入する。

されると嫌なこと、言われると嫌な言葉、うれしい言葉を知った後に、どのようなときに、どう声をかけていってらいいのかを練習する。名人カードは2つのスキルが終わってから1枚のカードで行う。「ありがとう」「ごめんなさい」も生かしていく。

感情・認知

トレーニング後の気付きはどうだったか。

振り返りカード

から

されるといやなことなど

・いやな言葉は言いづらかった。けれど、うれしい言葉はよく言えた。
・いやな言葉を言われたら悲しかった。うれしい言葉を言われたら、うれしくなった。言葉は人を傷つけたり、うれしくしたりするんだなと思った。
・悪口を言われたときはむかついた。うれしい言葉を言われたとき、心の中がぼかぼかした。これからは、自分がされるといやなことは、人もいやなのだから、やらないと決めた。
・「だいじょうぶ」「へいき」「すごいな」これからは良い言葉を探していきたいです。
・これからは言葉を言うときは人のことを考えて言うようにしたい。

相手の気持ちを考えた言葉かけ

・お友だちにやさしい言葉をかけられたら「ほっ」としました。これからは、相手の様子や表情を見てやさしい言葉をかけてみたい。
・お友だちが何かできたら「すごいね」などとやさしい言葉をかける。
・お友だちに声をかけた後にいろいろな言葉が返ってきてうれしかった。
・(ロールプレイで)転んだ役をしたとき「大丈夫」ってやさしい言葉をかけられてうれしかった。やさしい言葉を多くかけていきたい。
・やさしい言葉をかけてもらったら、ちゃんと答えたいと思いました。
・やさしい言葉をかけてもらったら元気が出た。かけたときは自分もこんなことができると思った。

目標決定

やさしい言葉をかける。
嫌な言葉を言わない。など

名人カード

名人カードでの指導者のかかわり

お友だちにやさしい言葉をかけてもらってよかったね。お友だちのやさしさに気が付いたね。励ましてもらったのうれしいよね。やさしく言えたところがとってもいいね。すごい。相手の様子を見て言葉をかけてあげられるのは、とても大事なことだね。

注 児童の感情・行動 が指導者の と対応している。

家庭のかかわり(親向けパンフレットの返事)

お友だちに嫌なことを言われると嫌な思いをするので、自分でも言わないようにとっています。

名人カードに記入した感情・行動

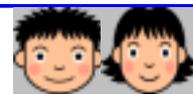
私が机にぶつかったとき、ちゃんが「大丈夫？」と言ってくれた。
こうじん(総合)のとき、「がんばれ」と言われて、うれしかった。
掃除のとき、「終わりだよ。集合」とやさしく言えた。
人の様子を見て言葉をかけた。コツがつかめた。

認知(カード終了後の感想) (は人数)

・友だちにいいことをしたら、相手もうれしいし、自分もいい気分になれる。
・やさしい言葉をいっぱいかけられた。いっぱい「ありがとう」と言われてうれしかった。
・やさしくすると自分もうれしい。 やっぱり親切っていいなと思った。
・やさしさ名人はこの後も必要だと思った。私は、この後ずっと、カードがなくてもやさしさ名人をめざそうと思う。
・自分でもこんなにできたので、びっくりした。とてもうれしいです。これからも続けていきたいです。

児童の変容

トレーニング後の行動(担任の観察)



・人に対して、嫌なことをすることが少なくなってきた。嫌なことを言ったりすると「封印したはずだろう」などとスキルトレーニングの中の言葉で注意し合う場面が見られる。
・女の子の口調がやさしくなってきた。

(2)抽出児にどのようにかかわっていったのか。 **A子の変容**



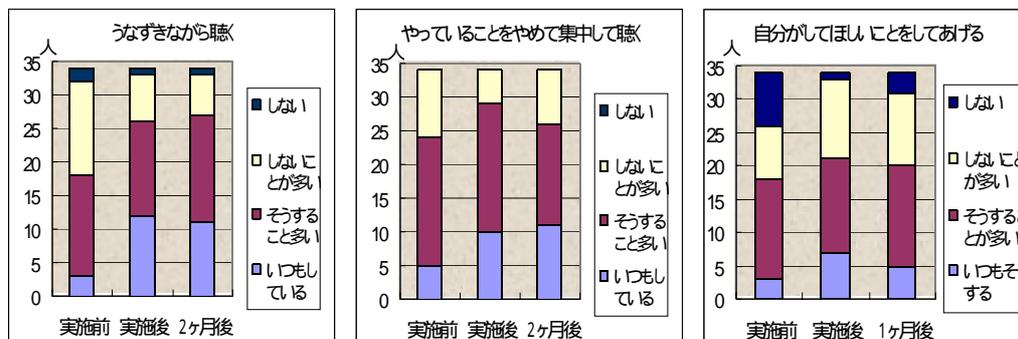
A子は「カードを終わらせていい気持ち」ということから、カードに記入するのを楽しみながら行動していった様子が見られる。行動しながら、自分が変わり、それを指導者に認められ、友だちからも認められ、「やさしいね」という言葉をかけてもらえるようになる。そうした指導者や友だちとのかかわりで行動が変容していったと考える。

2 実践の結果

トレーニング後の成果が、児童の日常の生活の中に生きているのか。自己評価、観察、アンケートに表れた児童の意識から考察する。

(1) 自己評価テストの項目の変化

トレーニング実施前、実施直後、1~2ヶ月後の自己評価テスト結果は、資料2のようになった。どの項目も実施後にトレーニングの効果が見られる。これは実践の概要7、8、9ページの振り返りカードの記述にもあるようにトレーニング内容の認識がしっかりできたからであると考える。また、実施1~2ヶ月後の自己評価テストでも実施後の成果が生きている。これは、7、8、9



ページの
実践の概
要にある
ような名
人カード
を使った
「日常生
活に生か
すための
活動」をと

資料2 自己評価テストの結果

おして、スキルについての認識が深まり、それが日常の生活の行動につながり、日常生活に生きていくとからと考える。

(2) 児童の行動、児童の意識にどう表れているか。

担任の観察

〈話の聴き方〉

- ・日直が号令をかけると背筋がぐっと伸びる。
- ・話し始めると注意が向き、聴き方を注意することがあまりない。
- ・聴き方が良くなり、成績が伸びてきた児童がいる。

〈「ありがとう」「ごめんなさい」〉

- ・「ありがとうございます」とお礼を言える子が多くなった。
- ・けんかをしているところに行ったとき、自分たちで謝って解決していることが多い。

〈相手の気持ちを考える〉

- ・自分のことだけでなく人のことを考えられる児童が増えた。
- ・女子のトラブルが少なくなった。

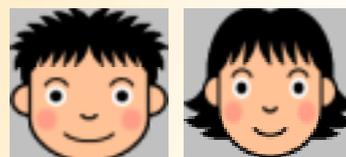


担任の観察から、トレーニング後 1~2 ヶ月経っても、話の聴き方はスキルで学んだことが生きていくと考えられる。「ありがとう」「ごめんなさい」や「相手の気持ちを考える」スキルでは、児童の中に相手の気持ちを考えられる変化が見られるようになってきていることが分かる。

児童の感想 (気をつけているところ意識、良くなったところ行動、 は人数)

〈話の聴き方〉

- ・姿勢を良くしたり、相手の目を見られるようになったりした。
- ・集中することに努力したら、結構聴けるようになった。
- ・友だちが話している最中に自分の話をしなくなった。
- ・話しているとき手悪さしていたのがやらなくなった。



〈「ありがとう」「ごめんなさい」〉

- ・「ありがとう」「ごめんなさい」を言うようになった。 自分から「ごめんね」と謝れるようになった。
- ・「ごめんなさい」と言うのが恥ずかしくなくなって謝れるようになった。
- ・「ありがとう」とよく言われるようになった。

〈相手の気持ちを考える〉

- ・「大丈夫」「平気」「すごいね」「がんばれ」などやさしい言葉をかけたり、褒めたりできるようになった。
- ・言われて嫌な言葉を言わないようにしている。
- ・泣いている子などに声をかけるようになった。
- ・言われてうれしいことを言うようにしている。
- ・困っている人を助けてやれるようになった。
- ・友だちから「やさしいね」と言われるようになった。
- ・人の気持ちを考えて行動するようになった。

児童の感想でも聴き方について良くなったと感じている児童が6名いる。また、「ありがとう」「ごめんなさい」が言えるようになった、相手の気持ちが考えられるようになったと答えている児童が多い。これらのことから、トレーニングの成果が日常の生活の中に生きていくと考えられる。

研究のまとめ今後の課題

1 研究のまとめ

本研究において学んだスキルが日常生活に生きてつながっていることが明らかになった。それには次のような理由が考えられる。

児童自身が自分でスキルの大切さに気付き、名人カードに取り組むことで目当てを持って行動した。

児童が目当てに向けて行動している姿に対して、名人カードをとおして、指導者が認めて、励ますという肯定的なのかかわりをしたことが変容につながった。

クラスの友だちが同じスキルを学び、個々のめあてを持ちながらも、同じ方向に向かって進んでいるので、お互いのかかわりがうまくいき、行動をとおしてスキルの大切さを実感できた。

「仲間づくり支援スキル」の選定は、トレーニングを行うスキルを絞り込む上で効果があった。

2 今後の課題

今後の課題として次の点が上げられる。

ソーシャルスキル・トレーニングの時間設定について

授業実践を行った学校では、総合的な学習の時間にフリー総合として設定されている時間を使って行った。トレーニングプログラムで実践した期間は約1ヶ月という短期間であった。聴き方スキルなどは国語の時間、他のスキルはその内容によって道徳や、総合的な学習の時間などを使い、年間を通した長期のサイクルで、学んだスキルが生かされるように配慮し、教育課程の中に組み込むことが望ましいと考える。

実態調査のアンケートについて

今回は自己評価として既存の社会的スキル尺度を使った。「仲間づくり支援スキル」を選定したので、やはりそれに合った自作のアンケートを作成する必要があったと考える。

「仲間づくり支援スキル」について

ソーシャルスキル・トレーニングのよりどころとして、「仲間づくり支援スキル」の選定を行ったがその基準については、今後、研究の余地があると考えられる。

<主な引用・参考文献>

- ・藤枝 静暁、相川 充 『学級単位による社会的スキル訓練の試み』東京学芸大学紀要(1999)
- ・大島みどり他 『児童期における遊びと社会的スキルの関連』東京学芸大学紀要(2002)
- ・庄司一子 『子どもの社会的スキル』菊池 章夫、堀毛 一也 編 『社会的スキルの心理学』川島書店(1994)
- ・相川 充 『人づきあいの技術』サイエンス社(2000)
- ・C.A. キング、D.S. キルシェンバウム 『子ども援助の社会的スキル』川島書店(1996)
- ・堀野 緑他 編 『子どものパーソナリティと社会性の発達』北大路書房 (2000)
- ・N. アイゼンバーグ 『思いやりのあるこどもたち』北大路書房(1995)
- ・國分 康孝監修 『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる』図書文化(1999)
- ・河村 茂雄 編 『グループ体験による学級育成プログラム』図書文化(2001)
- ・堂野 恵子他 『思いやり能力の発達』児童心理、金子書房 (2000年6月号)